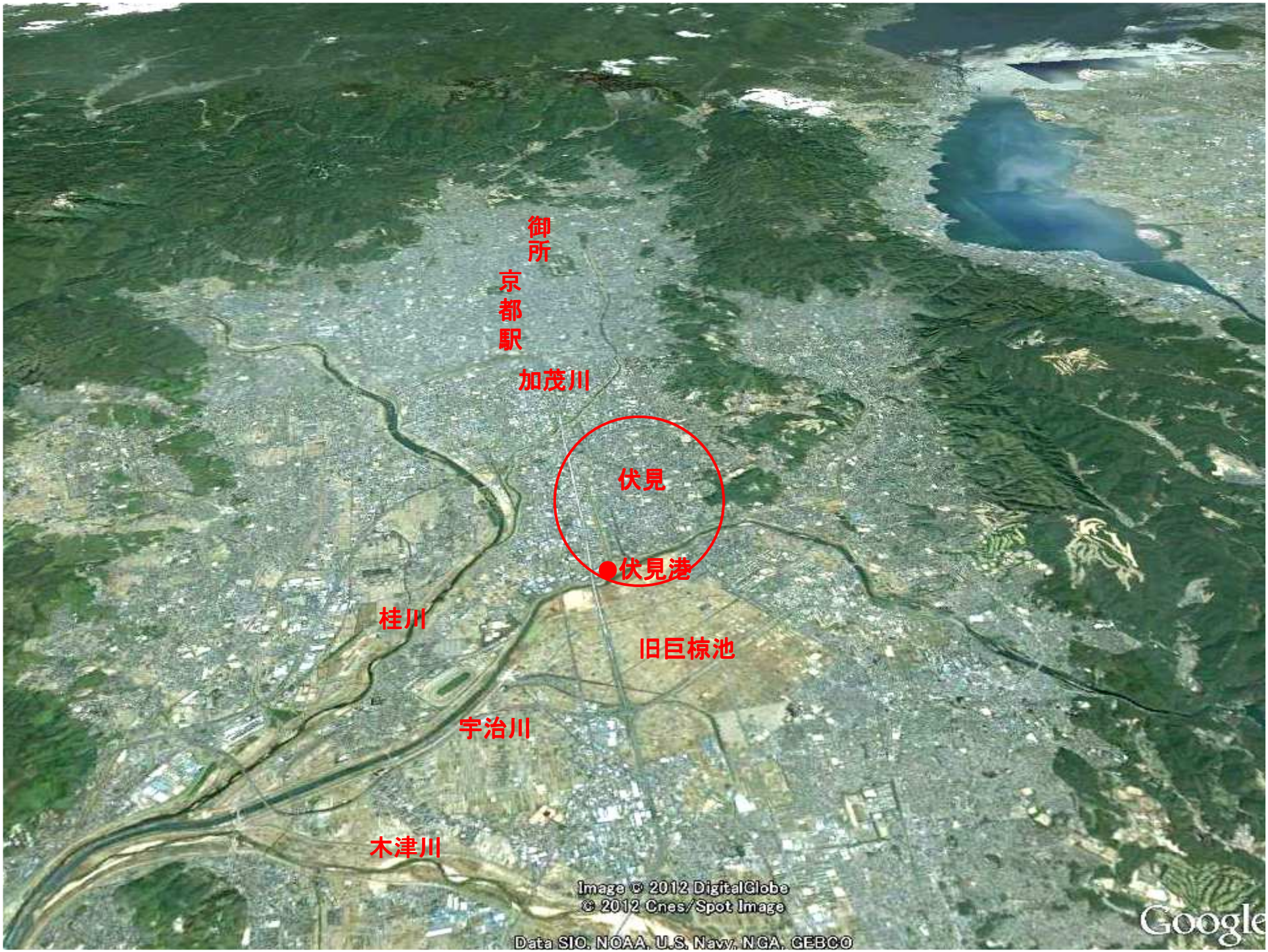


京都 伏見港を歩く

2012.5.15.


御所
京都駅
加茂川
伏見
伏見港
桂川
旧巨椋池
宇治川
木津川
Image © 2012 DigitalGlobe
© 2012 Cnes/Spot Image
Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO
Google


京都の南端 「伏見」の顔
京都盆地の南端に淀川に注ぐ三河川・巨椋池が作る広大な湿地を秀吉が大土木工事を実施し、政治・経済の中心に変身させた地で、秀吉以降 伏見桃山時代から昭和 そして現在まで 大いに栄えた街である
● 豊臣秀吉が開いた城下町・港町 伏見桃山時代の政治・経済の中心地
〇 京都盆地の南端 淀川に注ぐ桂川・宇治川・木津川の合流点 交通の要衝
〇淀川治水の要 秀吉の大規模河川改修工事で作られた街「伏見」と太閤堤
● 城がなくなった江戸期以降も大阪と京都を結ぶ水運で隆盛した港
〇 江戸期 角倉了以が開削した新高瀬川 三十石船と十石船
〇 昭和期 琵琶湖疏水(鴨川運河)を開削 大阪-京都-琵琶湖の水運
● 名水の地 「伏見の酒」 月桂冠・黄桜・月の桂・神聖・玉乃光・富翁 ・・・・・・・・・
灘の「男酒」に対して『女酒」ともいわれる決めの細かいまろやかな口当たり
● 宇治川の対岸に広がる広大な「巨椋池」の干拓
● 幕末 坂本竜馬 寺田屋事件の地
慶応2年(1866年)に発生した伏見奉行による坂本龍馬襲撃事件。
御所
京都駅
加茂川
伏見
桂川
旧巨椋池
宇治川
木津川
Image © 2012 DigitalGlobe
© 2012 Cnes/Spot Image
Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO
Google

京都の南端　「伏見」の顔

京都盆地の南端に淀川に注ぐ三河川・巨椋池が作る広大な湿地を秀吉が大土木工事を実施し、政治・経済の中心に変身させた地で、秀吉以降　伏見桃山時代から昭和　そして現在まで　大いに栄えた街である

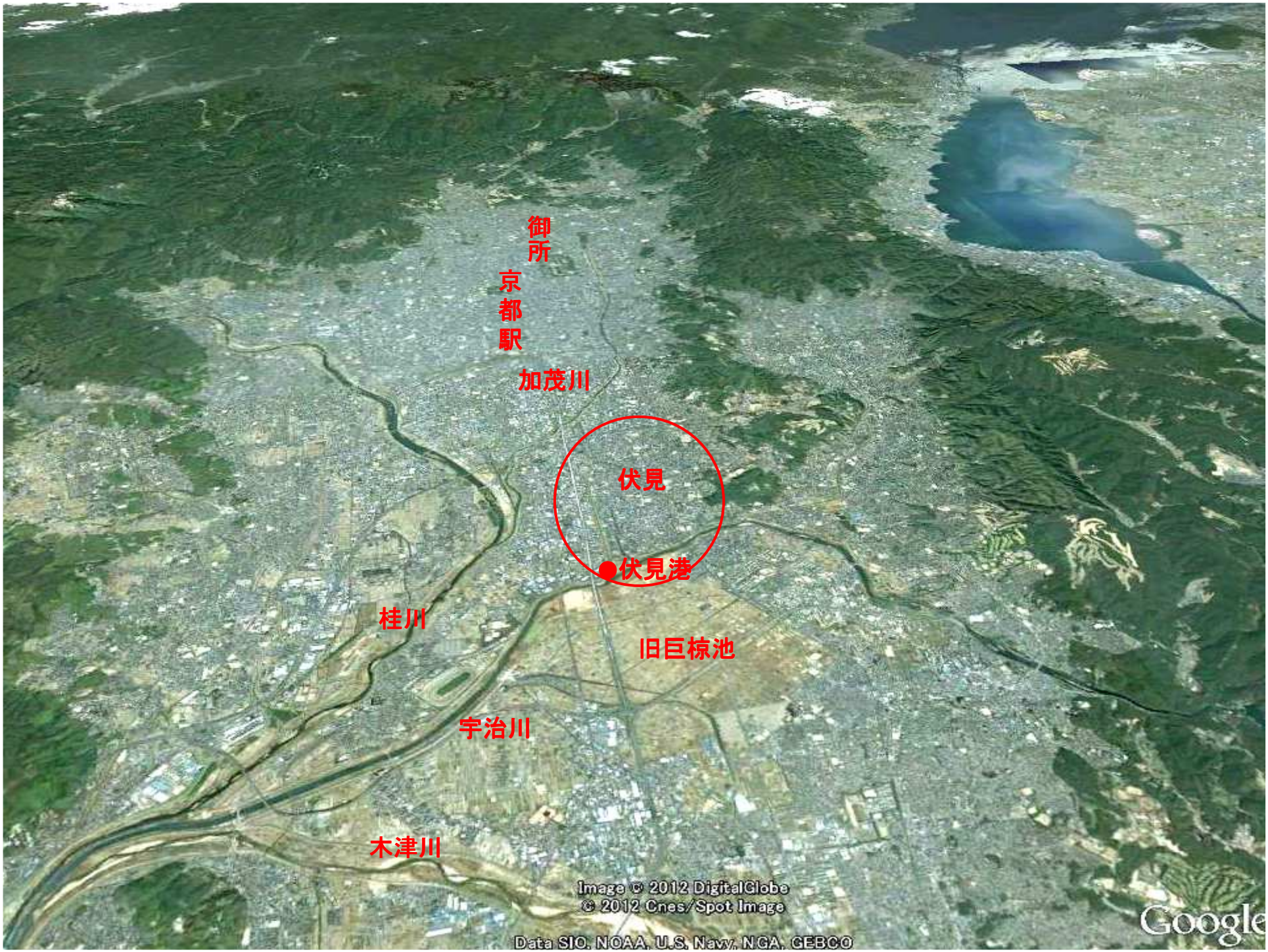
- 豊臣秀吉が開いた城下町・港町　伏見桃山時代の政治・経済の中心地
  - 〇　京都盆地の南端　淀川に注ぐ桂川・宇治川・木津川の合流点　交通の要衝
  - 〇淀川治水の要　秀吉の大規模河川改修工事で作られた街「伏見」と太閤堤
- 城がなくなった江戸期以降も大阪と京都を結ぶ水運で隆盛した港
  - 〇　江戸期　角倉了以が開削した新高瀬川　　三十石船と十石船
  - 〇　昭和期　琵琶湖疏水（鴨川運河）を開削　　大阪-京都-琵琶湖の水運
- 名水の地 「伏見の酒」　月桂冠・黄桜・月の桂・神聖・玉乃光・富翁　・・・・・・・・・・
  灘の「男酒」に対して『女酒」ともいわれる決めの細かいまろやかな口当たり
- 宇治川の対岸に広がる広大な「巨椋池」の干拓
- 幕末　坂本竜馬　寺田屋事件の地
  慶応2年（1866年）に発生した伏見奉行による坂本龍馬襲撃事件。

● 伏見　中書島　伏見港のあった地

現在の京阪中書島駅を中心とした地域であり、南北に竹田街道が通っている。
四方を川（南は宇治川、三方は濠川）に囲まれており、かつて島であった名残をとどめている。

文禄年間、中務少輔の職にあった脇坂安治が宇治川の分流に囲まれた島に屋敷を建て住んだことから「中書島」の名前が生まれたとされる。豊臣秀吉によって開発され武家屋敷が立ち並ぶようになったが江戸時代前期に荒廃したが、
その後、伏見城下にあった遊廓が移転され、繁栄するようになる。
酒の名所であるために遊びに来る人が多く、また、宇治川に近く、交通の便が良い中書島は遊廓であると同時に花街でもあり、祇園をしのぐほどの名妓を輩出してきた。明治末期には京阪電車が開通し、ますます栄えるようになったという。

ところで、こんな過去を持つ場所であり、年配の関西人には　なじみの名前であるが、
現在は普通の住宅地であり、花街、遊廓時代の面影はほとんどない。
また、「中書島」の地名は残っておらず、京阪電車の駅類として残るのみ。
これも　時代の流れか・・・・


御所
京都駅
加茂川
伏見
伏見港
桂川
旧巨椋池
宇治川
木津川
Image © 2012 DigitalGlobe
© 2012 Cnes/Spot Image
Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO
Google

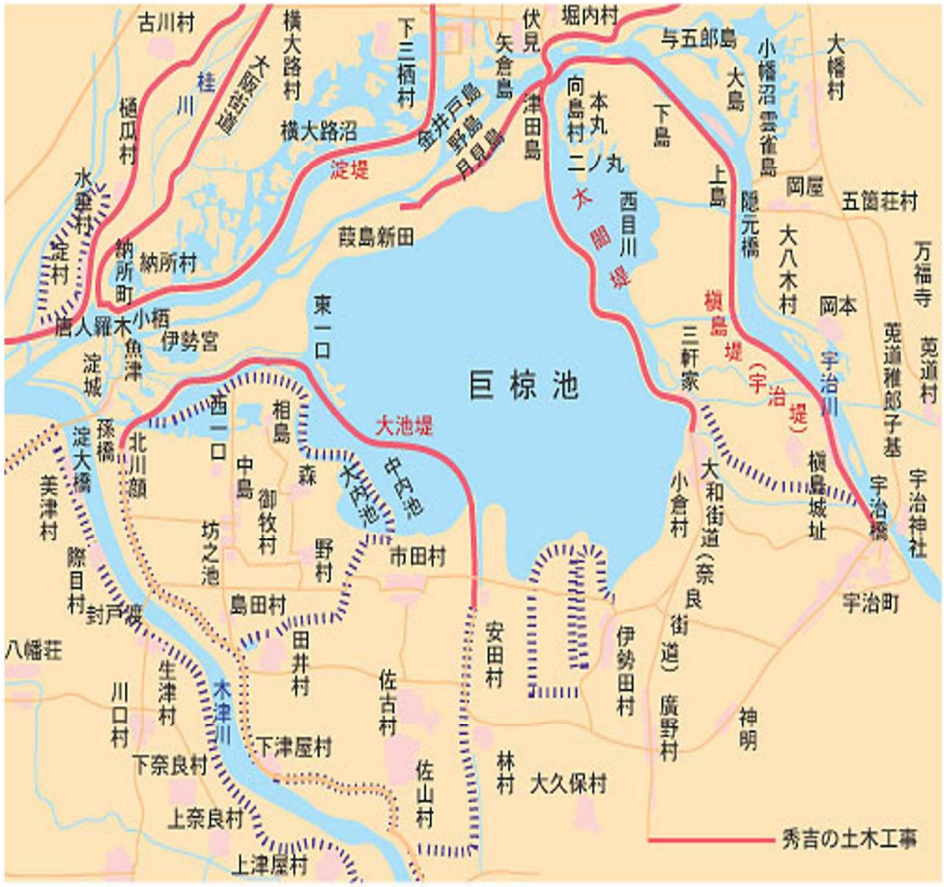

木津川
淀川
旧巨椋池
伏見港
宇治川
中書島
濠川
桂川
御香宮
伏見
東高瀬川
丹波橋
琵琶湖疏水
Image © 2012 Digital Earth Technology
Image © 2012 DigitalGlobe
Image © 2012 GeoEye
Google earth

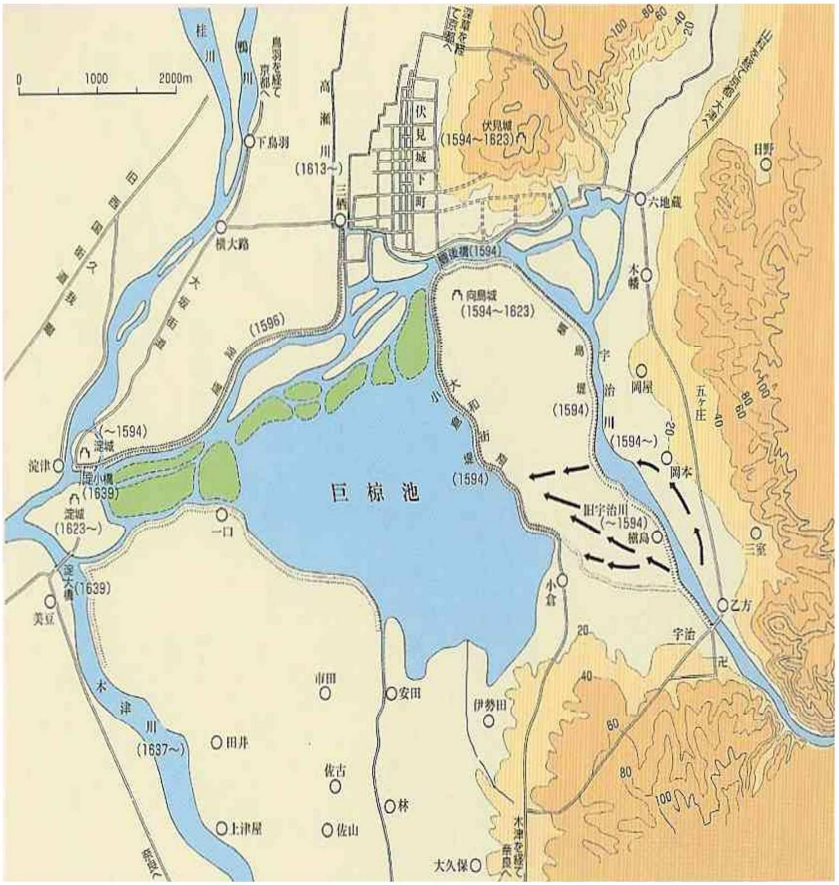
伏見港は秀吉によって作られた人工の城下町・港町

豊臣秀吉による巨椋池周辺の大改修と伏見港の建設

秀吉の時代の巨椋池沿岸図

当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。





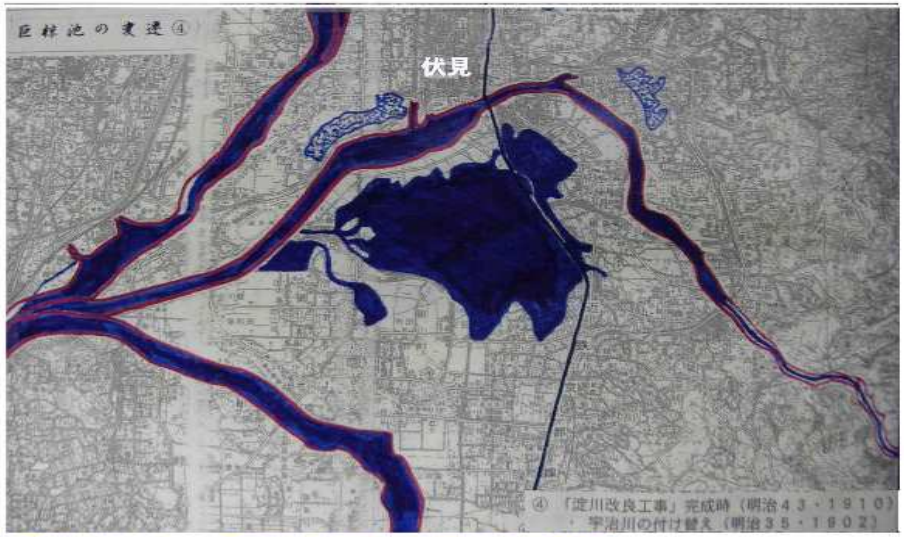
淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



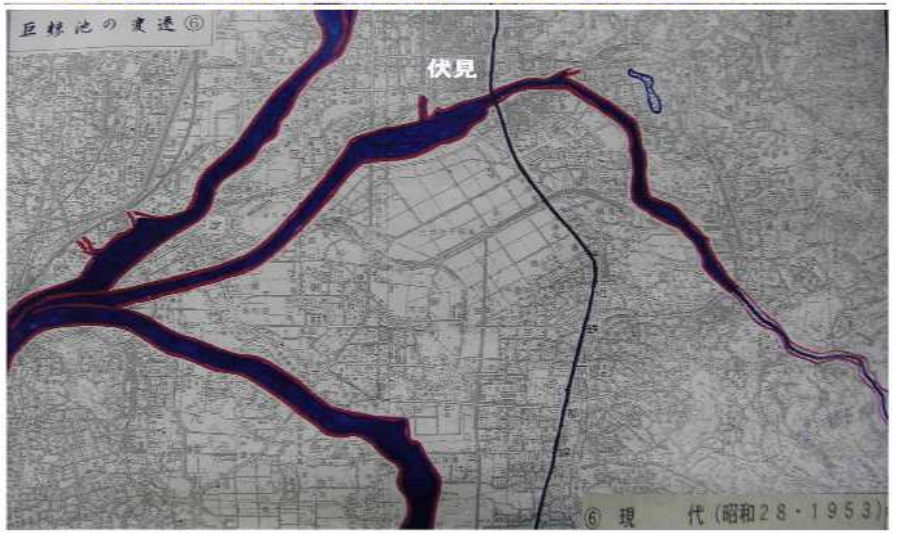
秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤（太閤堤）着手前　文禄以前（1590）



秀吉による河川工事後　文禄5年（1596）
・文禄堤の築造、左岸連続堤の概成　・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後　明治18（1885）木津川の付け替え
明治35（1902）宇治川の付け替え



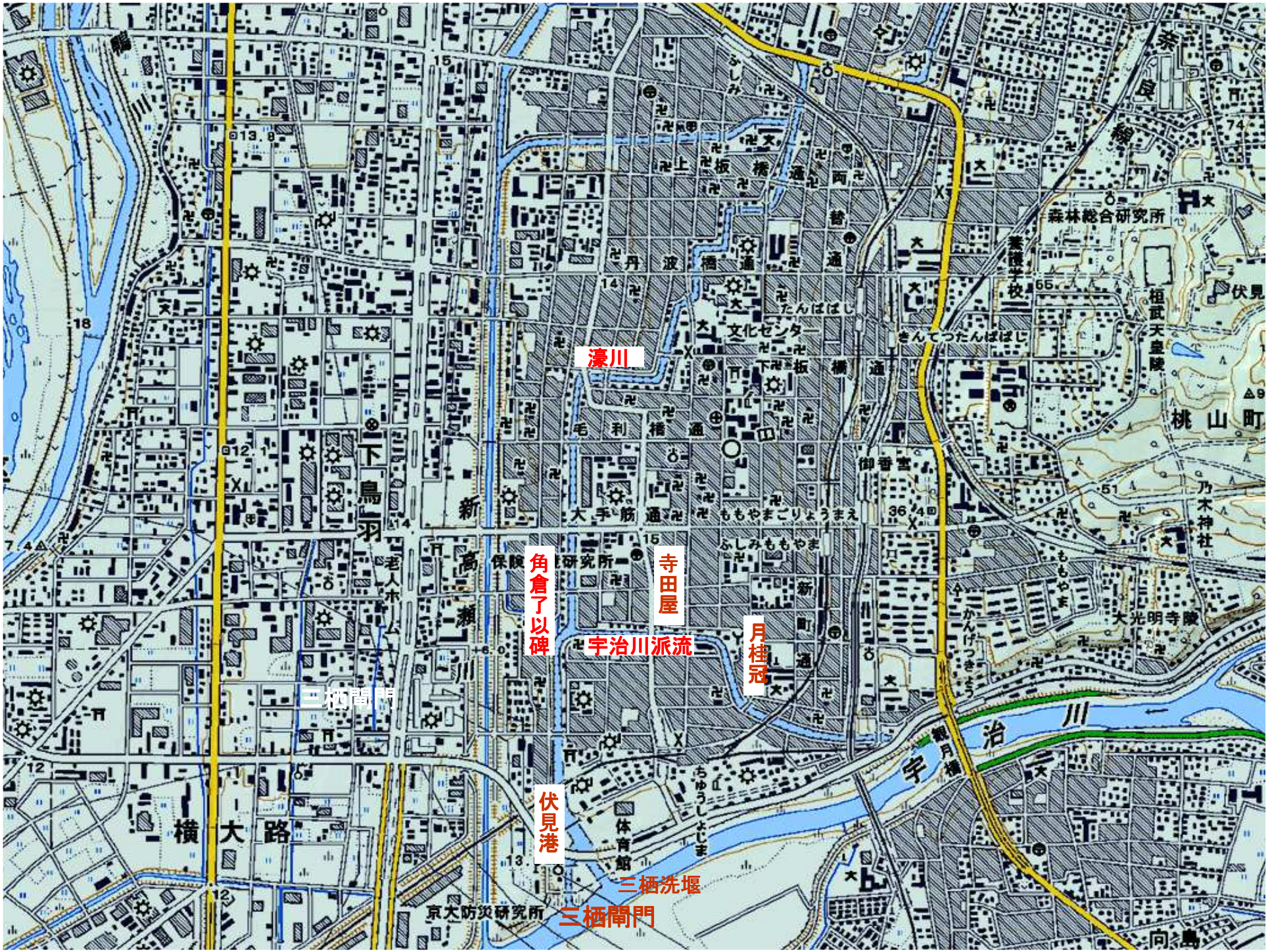
昭和の改修・巨椋池干拓後（現在）
巨椋池干拓　大正7年（1918）～昭和16年（1941）
三川合流点の道流堤、引堤等　昭和8年（1933）
今の堤が完成　昭和43年（1968）

水運 伏見港の要　「高瀬川」と琵琶湖疏水（鴨川運河）






東高瀬川
南尼崎町
琵琶湖疏水
丹波橋
東堺町
御香宮
竹田街道
大手筋
角倉了以の碑
濠川
京橋
寺田屋
月桂冠
大倉酒造
北浜
宇治川派流
南浜
新高瀬川
西浜
長建寺
京阪
中書島
伏見港公園
伏見港
三栖閘門
三栖洗堰
宇治川
濠川を行く蒸気船
伏見船場
伏見港　京橋


濠川
角倉了以碑
寺田屋
宇治川派流
月桂冠
三栖閘門
伏見港
三栖洗堰
三栖閘門
京大防災研究所
宇治川
観月橋
桃山町
森林総合研究所
大光明寺陵
乃木神社
横大路
下鳥羽
新高瀬川
体育館
向島



旧伏見港のすぐ東側　京阪中書島駅　　2012. 5. 15.

すぐ前の丘が伏見港公園　この丘を奥左に回りこむと　公園整備された伏見港　濠川の岸に出た

伏見港船溜まりを埋めて整備

伏見港公園

体育館・プールやテニスコートなどの諸施設の丘を抜けると伏見港濠川の岸に出る。








宇治川派流（一級河川）・伏見港



宇治川派流・伏見港は豊臣秀吉の伏見城築城流路改修によって形成され、
各時代にわたって京都・大阪を結ぶ交通の要衝として栄えた河川港である。
幕末には、寺田屋騒動や坂本竜馬の活躍などわが国の歴史の主要な舞台ともなった。
また、角倉了以の高瀬川開削、近代の琵琶湖疏水開削、淀川改修などと深くかかわる
など、わが国の政治経済・土木技術史上極めて高い歴史意義をもった地域である。

中書島　伏見港公園の案内板より



南側　濠川の宇治川出口方面　左:三栖洗堰　右:三栖閘門





濠川東岸より水路の上流　伏見の町・京都側
木橋の向こうに京阪の鉄橋が見える

伏見港



伏見港の出口　左:三栖洗堰水門　右:三栖閘門の入口



木橋を渡った対岸から伏見港水路全景　インターネットより







木橋を渡って　対岸を宇治川への出口　三栖閘門へ　2012.5.15.


















三栖閘門　伏見港側

2012. 5. 15.

伏見港　宇治川出口に設けられた三栖閘門

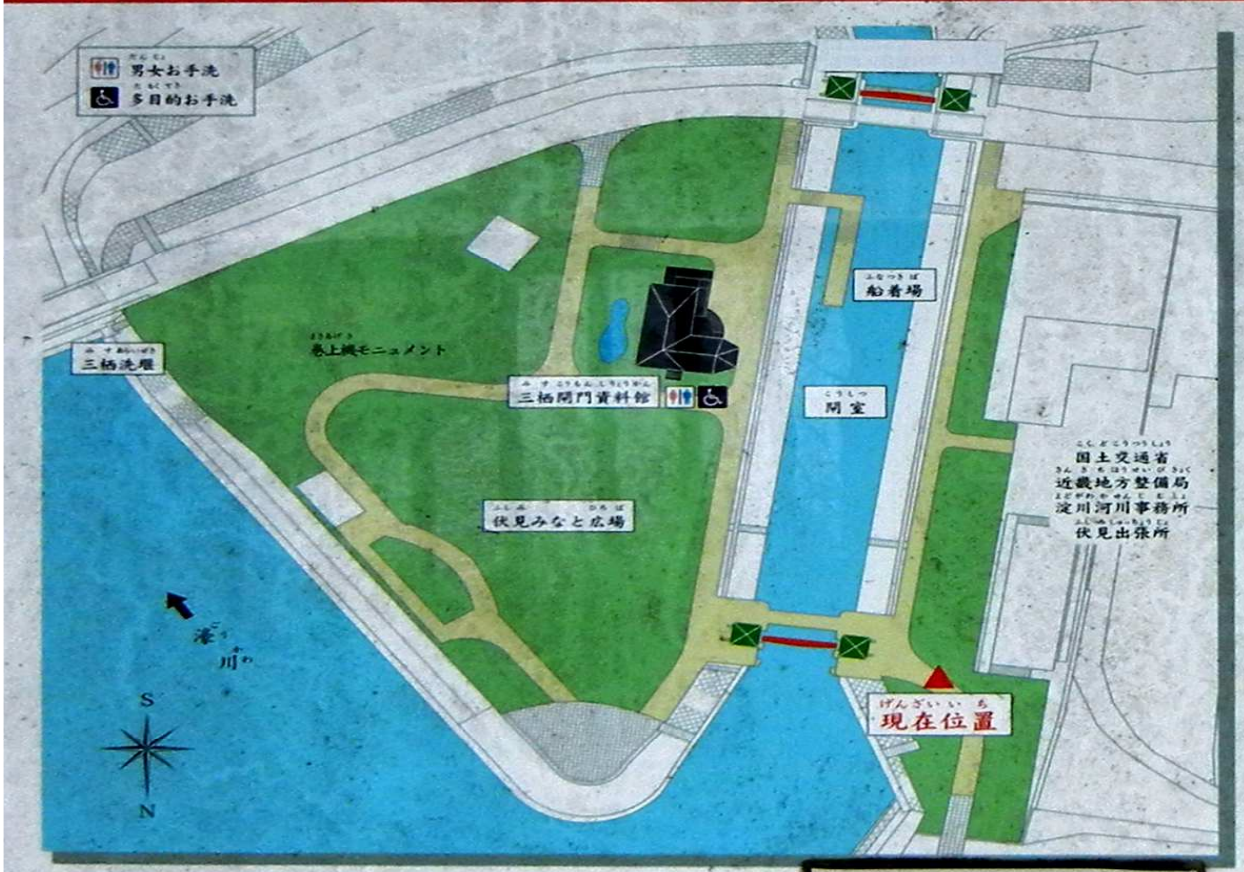
1929（昭和4）年に宇治川の改修を行った際に、宇治川の堤防が整備され、宇治川の水位が下がり、宇治川と濠川に水位差が生じたために、宇治川との舟運連絡を図るために伏見港と宇治川を結ぶ施設として設けられた土木構造物。
2つのゲートで閘室内の水位を調節し、水位の違う濠川と宇治川を連続させて、船を通す施設です。
昔は、たくさんの船が閘門を通って、伏見と大阪の間を行き来していた。
現在、道路や鉄道の発達で、交通路としては利用されていないが、地域との関わりが深く、歴史的にも大変貴重な施設で地域のランドマークとなっている。

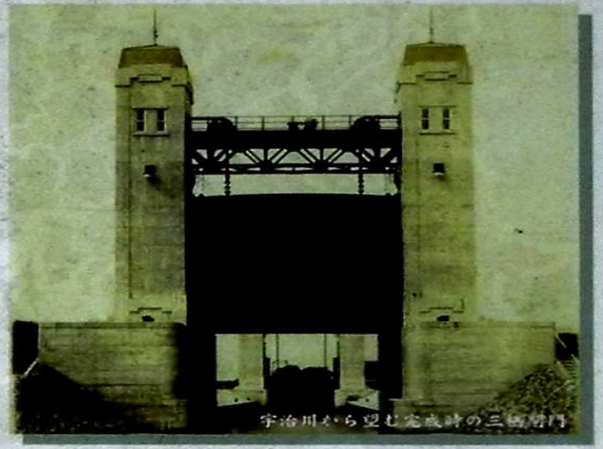


三栖閘門と三栖閘門資料館

Google earth

昭和初期の土木遺産 三栖閘門




宇治川から望む完成時の三栖閘門

三栖閘門は伏見港と宇治川を結ぶ施設として昭和4年（1929）に造られました。2つのゲートで閘室内の水位を調節し、水位の違う濠川と宇治川を連続させて、船を通す施設です。

昔は、たくさんの船が閘門を通って伏見と大阪の間を行き来していました。

現在、道路や鉄道の発達にともない、交通路としては利用されていませんが、地域との関わりが深く、歴史的にも大変貴重な施設です。

※濠川（ごうかわ）は、「ほりかわ」とも呼ばれています。

三栖閘門資料館

開館 9:00～16:30
休館日 月曜日



昔の操作室を復元した資料館です。
三栖閘門の役割や濠川として発達してきた伏見の歴史などを紹介しています。

船着場

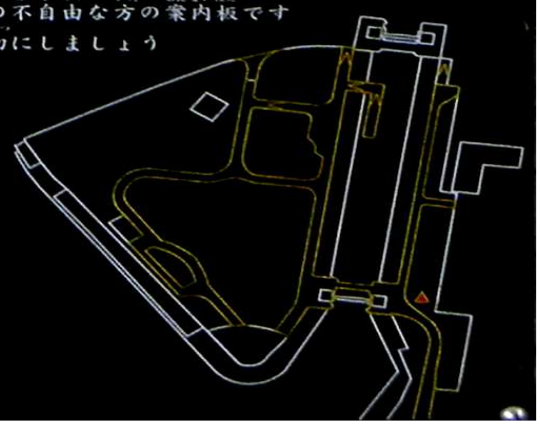


船が航行していた当時の風景を再現し、船着場として利用しています。

現在休止中

しばらくの間お待ち下さい。

目の不自由な方の案内板です
大切にしましょう



三栖閘門

産業技術遺産探訪　2004.8.7.より

http://www.gijyutu.com/ooki/tanken/tanken2004/misu-koumon/misu-koumon.htm



三栖閘門



前扉室（伏見港水路側）





三栖閘門・後扉室（宇治川側）

◎　三栖閘門バイパスゲート（前扉）



三栖閘門・前扉室



閘門ゲート



八幡製鉄所の表示

型式	鋼製スライドゲート	門数	2門
扉体幅	1．640m	扉体高	1．480m
揚程	1．200m	扉体重量	0．687t
設置年月	昭和62年3月	製作	近畿設備株式会社

◎　三栖閘門・後扉室側の旧巻上機





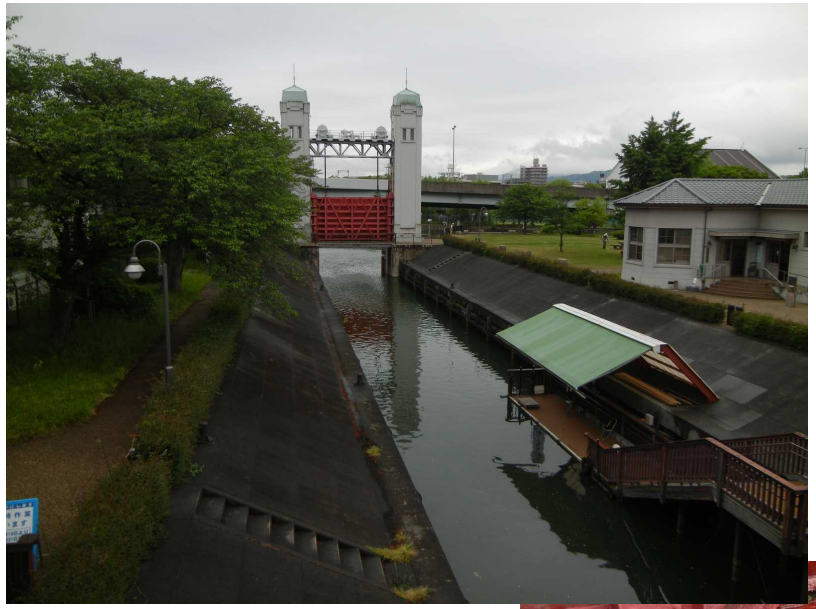






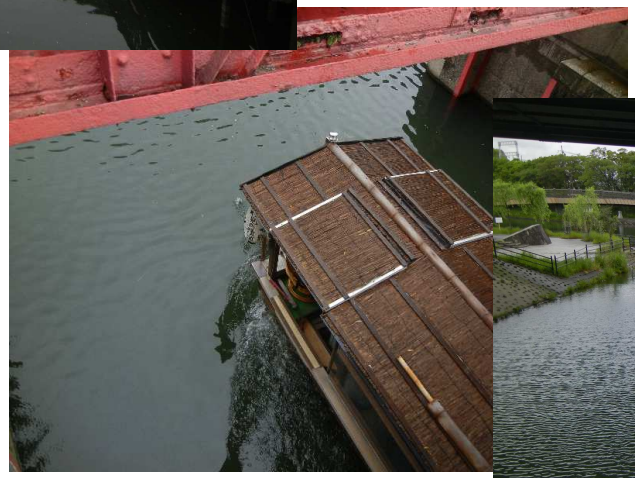


伏見港から宇治川への出口　三栖閘門　現在は宇治川の水位が下がり使われていない













もう閘門は動いていませんが、閘門内の船着場から　伏見港水路に出てきた観光十石舟　2012. 5. 15.







三栖閘門の南側　　宇治川の向こうには　旧巨椋池が埋め立てられて出来た広々とした田園地帯が広がっていました　　2012. 5. 15.

三栖閘門の南側

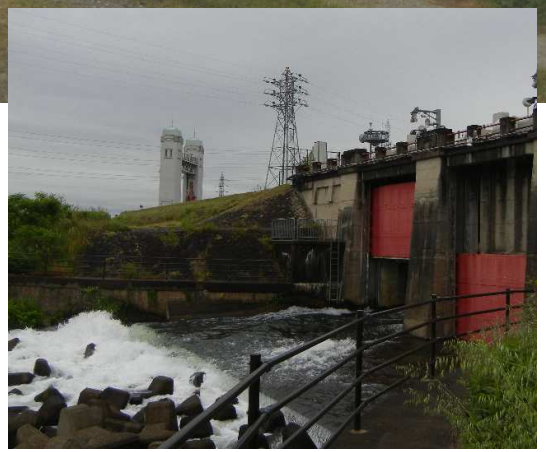
宇治川の向こうには　旧巨椋池が埋め立てられて出来た広々とした田園地帯

また、京都へ伸びる宇治川基撰山発電所からの送電線が川をわたってゆく

2012. 5. 15.

















三栖洗堰　2012.5.15.

三栖閘門と対をなす三栖洗堰

濠川の水量調節に今も働いている。

現在の宇治川と洗堰の位置関係　落差の大きさにびっくり。

これは、上流側に設けられた関西の大水甕で天瀬ダムの完成で水位・水量が大幅に落ちたためと見える。

この宇治川の水量低下で　三栖閘門の機能は失われ、

現在　宇治川から伏見の港・水路に直接船で入ることは出来ない。









三栖閘門と三栖洗堰の間の三角島に立つ三栖資料館　　伏見港･閘門の歴史資料を展示　　2012.5.15.

高瀬川の開削でより栄えた伏見港

大坂から船によって運ばれてきた物資は、伏見港で荷揚げされたのち、
陸路を利用して京都へとどけられていました。
これを一変させたのが、1614年（慶長19）の高瀬川開削でした。
この運河の完成により、伏見港に集積された物資は船を使って京都の町へと運ばれるようになりました。
高瀬舟の登場によって、伏見港は大坂と京都の町を結ぶ中継地となり、よりいっそう発展しました。

1 運河として誕生した高瀬川

3年の月日をかけて完成した、伏見港と京都市内を結ぶ水上輸送路。

高瀬川は京都の豪商・角倉了以と息子の素庵により開削されました。工事は1611年（慶長16）から約3年をかけ、二条から伏見港までを結ぶ幅約8m、全長11.1kmの大運河となりました。底の平らな十五石積みの高瀬舟が行き来し、京の町への水上輸送手段として活躍しました。

高瀬川によって、大坂～伏見～京都が舟運で結ばれ、中継点となった伏見港は、さらに繁栄します。また伏見港は西国大名が参勤交代する時の滞在地となり、中心である京橋付近には本陣が置かれ、宿場町としても賑わいました。





江戸時代の京都絵図（京都市歴史資料館所蔵）





高瀬舟復原（京都市提供）

2 高瀬舟で運ばれた物資

材木、薪炭、米、塩などを積んで、川上をめざす高瀬舟の一団。

淀川舟運で大坂から運ばれてきた物資は、伏見港でいったん降ろされ、10数艘の高瀬舟に積み替えられて夜明けとともに共綱につながれて高瀬川を上っていきました。

高瀬川沿いにある木屋町通りは、大坂からの物資の集積地として発展したまちです。川沿いには、材木や薪炭、米、塩などの問屋や倉庫が建ち並び、賑わいを見せていたそうです。

運びこまれる物資の中心だったのが材木や薪炭で、これらを扱う問屋が多いことから木屋町という名称がついたといわれます。

高瀬舟の荷物を積み降ろしたりするために設けられたのが「舟入り」で、二条～五条間には9ヵ所あったといわれています。



Column ちょっと一息

文豪・森鷗外が1916年（大正5）に発表した小説「高瀬舟」

高瀬舟を舞台とする、弟を殺した罪人と護送する役人の物語です。高瀬舟は物資だけでなく、このように罪人をいったん京都から大阪へ運ぶ時にも使われていました。

「晴れやかな表情を浮かべている罪人に対して、役人がその理由をたずねると、罪人はやがてなぜ弟を殺害したのかを語りはじめます…。」

"安楽死"を題材にしたこの小説は、軍医でもあった森鷗外だからこそ描けた小説といえるでしょう。



高瀬舟絵巻（京都市歴史資料館所蔵）

城下町『伏見』の誕生

伏見の本格的な発展は、豊臣秀吉の伏見城築城に始まります。
天下統一後、1583年（天正11）に大坂城を、1586年（天正14）には京都に聚楽第を造った秀吉は
1591年（天正19）に関白職を甥の秀次に譲ると、伏見に城を築きます。
伏見を選んだのは、大坂と京都、奈良に目がとどく地だったからです。
ここでは秀吉が伏見に建てた城と城下町のようすを紹介します。

1 淀 城

1589年（天正17）に大修築され、側室・茶々の産所となった城です。

淀城は、もともと室町時代の細川政元が、淀川と桂川、木津川の合流地点に築いた城でした。秀吉は、この城を側室・茶々の産所とするために大修築します。やがて、この城で鶴松を出産した茶々は「淀殿」と呼ばれるようになります。

鶴松がわずか3歳で亡くなると、秀吉は悲しみを忘れ去るためか、1594年（文禄3）に淀城を廃城とします。



2 指月城

"不死身"を願って建てた隠居屋敷を、本格的な城に改築。

1592年（文禄元）、秀吉は伏見にある指月の丘に茶会などを催す隠居屋敷を建築します。息子の鶴松や母の大政所、弟の秀長と身内の死が相次いだため、"不死身"に通じる"伏見"の地を選んだといわれています。

1594年（文禄3）には淀城の天守などを移設して屋敷を城に改築し、指月城とします。これは来日する朝鮮使節に権威を誇示するためと推測されます。



3 向島城

指月城の出城として造られた月見用の城でした。

徳川家康が向島の下屋敷で催した観月会で、秀吉はこの地から眺める月の美しさに感服し、指月城とは別に私的な城として向島城を建てました。現在では城址を思わせるものは残っていませんが、本丸町や二の丸町の地名に名残をとどめています。



向島城跡





豊臣秀吉作成の伏見城復元図（文禄1953による）



5 城下町「伏見」の創生

1594年（文禄3）頃に始まったまちづくり、現在のまちの原型が見られます。

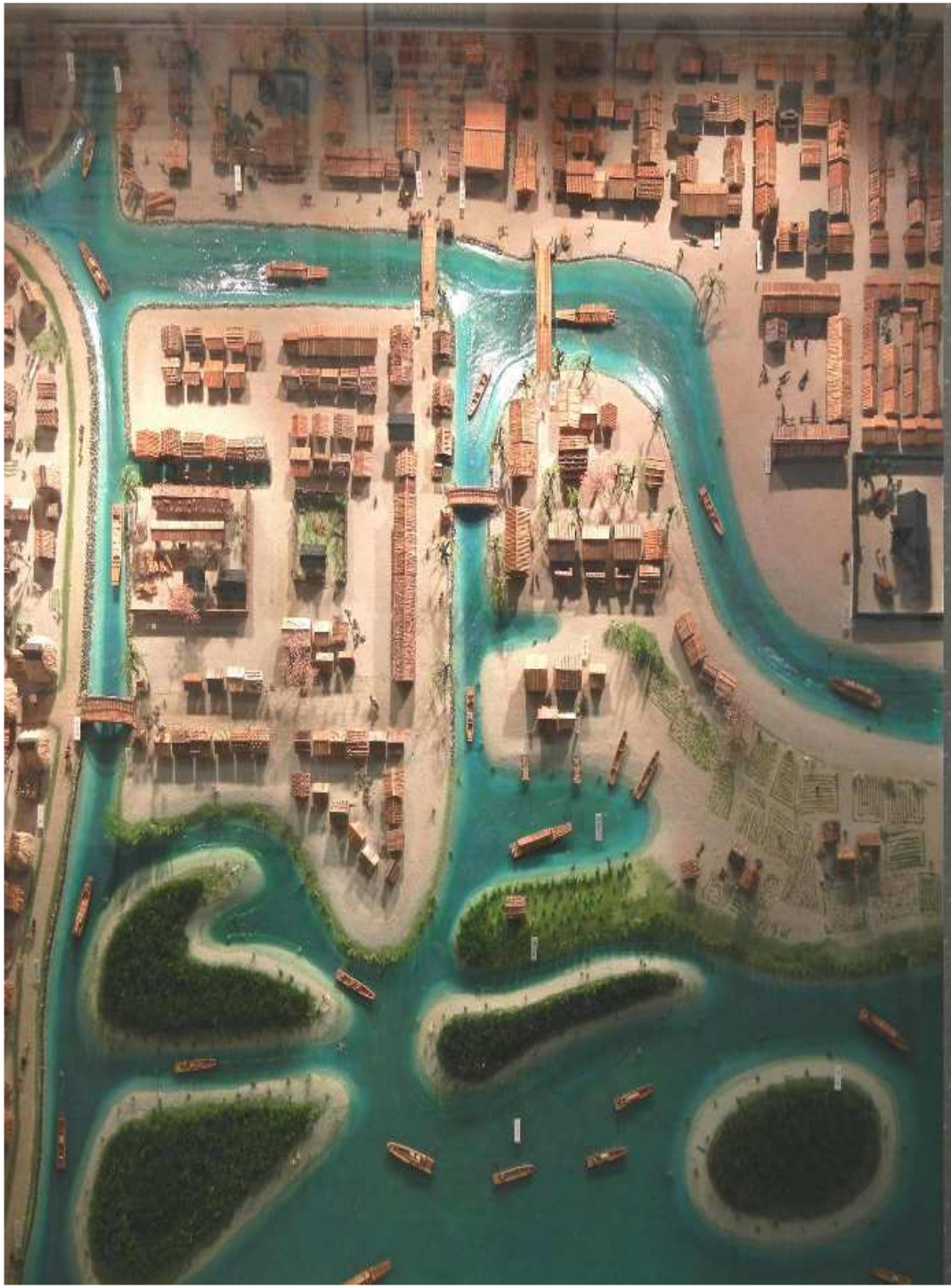
秀吉は、東西約6km、南北約4kmの広大な地域を区画整理し、城を取り囲むように580以上もの武家屋敷を配置しました。大名屋敷の名は、伯耆町、備後町、讃岐町、あるいは丹波橋、肥後橋、豊後橋、向波橋などの地名や橋名として今も残っています。

城の西には商人町や職人町が設けられ、にぎわいをみせたそうです。同業者による町も設けられ、材木町、魚屋町、塩屋町、船大工町、紺屋町などはその名残といえます。

秀吉はこうした城下町の基盤を支えるため、伏見港の整備による「水路の確保」、京都から伏見城下町を通過して奈良へつながる「新大和街道」などによる「陸路の確保」にも力をそそぎました。







伏見港と伏見の町

1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いにより、天下を掌握した徳川家康は、秀吉のまちづくりを引き継ぎ、伏見は江戸時代になっても依然として日本最大の城下町であり、政治都市でもありました。

問屋や宿屋が建ち並び、酒造や竹細工など伏見独自の産業も生まれてきました。人口は増加し、伏見は庶民のまちとして大いに発展していきます。

伏見と大坂間を過書船（三十石船）が行き来するようになると、伏見港は物資だけでなく多くの旅人で賑わうようになりました。

1635年（寛永12）に参勤交代が制定されると、西国の大名は大坂から船で伏見港に上陸し、東海道を江戸へ向かうようになりました。このため伏見には多くの大名屋敷・倉庫・旅籠がならび、伏見港は“京都と大坂を結ぶ”から“西国と東国を結ぶ”重要な拠点へと発展しました。

この模型は、江戸中期の古地図を基に制作しましたが、町並みは少し誇張してあります。

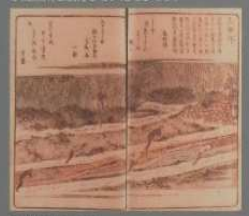


伏見港の船

秀吉の時代から始まる長い歴史のなかで、
伏見港にはさまざまな種類の船が現れ、消えていきました。
そのいずれもが、時代に対応した目的と役割を持ち、伏見港の発展を支えました。
ここでは、船の種類ごとに、その歴史や役割について紹介します。

高瀬舟

"高瀬"は浅瀬を意味し、水深の浅い運河や掘などで使われた平底の小舟であり、高瀬舟と呼ばれました。高瀬舟は、日本各地で見られ、京都では角倉了以が1614年（慶長19）に開削した運河を行き来し、伏見と京の町の間で人や物資を運んでいました。このことから運河は「高瀬川」と呼ばれるようになります。最盛期には数百隻が高瀬川を航行していたそうです。



高瀬舟（宇治川両岸一覧）

伏見船

過書船に対抗して1698年（元禄11）に伏見奉行が支配した船で、過書船同様、特権的な営業権を所有していました。大坂の天満橋または京橋までを航行区域とし、市中まで入ることはできませんでした。江戸時代の享保年間を最盛期とし、淀川を約200隻が行き交っていました。



伏見船札
1845年（弘化2）
（淀川資料館所蔵）

過書船

過書とは関所を通航できる許可書のことで、過書を与えられた船を過書船と呼びました。
秀吉の頃から登場した船ですが、1603年（慶長8）に家康によって制度化され、銀500枚の運上金で過書（朱印状）が与えられ、過書座（過書奉行（角倉与一・木村宗右衛門）の支配下に置かれました。当初は伏見・大坂・尼崎を航行区域としましたが、のちに伏見～大坂（天満橋）間に改められました。荷船は主に20～200石船、客船は三十石船で、いずれも江戸時代の享保初期には数百隻を数えました。



過書船（石清水八幡）



伏見港の船（昭和初期）

淀　船

室町時代以前からあった二十石積みの船で、淀二十石船とも呼ばれました。
また淀川遡水期には大型船の上荷を転載したので淀上荷船とも、さらに1603年（慶長8）以後は過書座の支配下になったため、過書二十石船とも呼ばれました。



淀上荷船（大清右衛門）

蒸気船

1870年（明治3）から伏見～大阪間を運航したもので、大阪の綿屋吉郎兵衛がはじめて就航させたといわれています。当時は「川蒸気」と呼ばれていました。以来、17tの外輪式小型蒸気船に始まり、大正期には100隻を数える船舶が往来し、賑わいました。
しかし、1910年（明治43）の京阪電車の出現により、衰退していきます。



淀川を通行する蒸気船

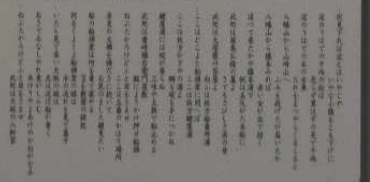


（淀川）（淀川両岸一覧）

Column ちょっと寄り道

今も歌い継がれる淀川三十石船の船頭衆の船頭歌 三十石舟唄

伏見から大坂へ向かう三十石船から眺める両岸の風景を七・七・七・五調の音数で唄い上げています。
明治中期にはいったん途絶えましたが、舟唄を歌い継いでいた市川九平次氏を中心に「淀川三十石船舟唄大塚保存会」が結成され、今も舟唄の保存と普及に努めています。2002年（平成14）には大阪府無形民族文化財の指定を受けています。





十石舟（部分）

最盛期の伏見港

1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いにより、伏見の象徴である伏見城はほとんど消失してしまいます。
しかし、天下を掌握した徳川家康は伏見城を修築・増築し、再現します。
家康は秀吉のまちづくりも引き継ぎ、伏見は依然として日本最大の城下町であり、政治都市でもありました。
ここでは、江戸時代の伏見のまちが、政治都市として、産業都市として、
いかに活力にあふれていたかを紹介します。

1 城下町「伏見」の発展

江戸時代になっても、秀吉が築いた舟運と陸路が伏見を繁栄へと導きます。

秀吉・秀頼のもと、日本随一の城下町に発展した伏見は、江戸時代になってもその活力が衰えることはありませんでした。
宇治川・淀川の整備と高瀬川の開削による水上運輸の拡大や伏見街道・竹田街道・新大和街道・大津街道などの陸上交通の整備により、人と物が集まる都市としてさらに隆盛を極めていきます。問屋や宿屋が建ち並び、酒造業や大工道具、竹細工工業など伏見独自の産業も生まれてきました。人口は増加し、伏見は庶民のまちとしておおいに発展していきます。



伏見御城絵図并御殿割之絵図（伏見桃山城研究）

2 政治都市・伏見

日本初の銀座が開設され、伏見は江戸時代も政治の中心にあるまちでした。

1600年（慶長5）年の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、秀吉がてがけた伏見のまちづくりを引き継ぎます。1601年（慶長6）にはわが国ではじめて貨幣を鋳造する銀座を伏見に開くなど、依然として伏見は随一の政治都市でした。
1603年（慶長8）に江戸に幕府が開かれますが、家康や2代将軍・秀忠は江戸幕府の基礎を固めるため、伏見を拠点に政治的手腕を発揮していました。



徳川家康（1542～1616）
三河国（現 愛知県）岡崎城主のすえに生まれる。いくたの苦難と人質生活のすえに今川義元の後見役、やがて桶狭間の合戦ののち、戦国の荒海、駿・遠の国々に進出し、天下統一を果たす。
（江戸城とその中心に展開する大名屋敷）

円山応挙（1733～1795）
と淀川両岸図（部分）
江戸中期の画家であり、日本画の近代化に貢献した。代表作の他、「保津峡図屏風」や「雪松図屏風」などの写生画の傑作を残している。ここでは、淀川両岸の風景を描写的に描いた作品です。
この絵は、伏見側を描いたものです。
（財）メトロポリタン美術財団所蔵）

3 産業都市・伏見と伏見港

多くの過書船が発着し、西国と東国を結ぶ一大流通拠点に成長。

江戸時代、伏見と大坂の間を過書船（三十石船）が行き来するようになり、伏見港は物資だけでなく多くの旅人で賑わうようになりました。
1635年（寛永12）に参勤交代が制定されると、西国の大名は大坂から船で伏見港に上陸し、しばらく滞在したのち、東海道を江戸へ向かうようになりました。
このため伏見には多くの大名屋敷・倉庫・旅籠がならび、"京都と大坂を結ぶ"から"西国と東国を結ぶ"重要な拠点へと発展しました。
産業・経済における伏見のまちの活力は、幕府が伏見を京都奉行の管轄からはずし、独自に伏見奉行を置くほど強大なものでした。





（宿　場）（淀川両岸一覧）



（伏見御城）（淀川両岸一覧）



伏見奉行所（部分）

淀川の治水と三栖閘門

淀川は昔から氾濫を繰り返し、そのたびに伏見周辺の住民は洪水に悩まされてきました。
伏見周辺の治水の歴史は、豊臣秀吉が伏見に城下町を築いた時から始まり、
土木行政の近代化が急速にすすんだ明治時代には、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらの指導による
大規模な治水工事が次つぎに実施されました。

安土・桃山時代

伏見の繁栄と人びとの暮らしを守るため、治水事業に取り組む。

秀吉の指揮のもと、宇治川と巨椋池が分離され、宇治川左岸沿いに宇治堤、巨椋池上に太閤堤・大和街道などの堤防が築かれました。伏見以南の宇治川右岸沿いや桂川左岸沿いの築堤も進められましたが、その後も宇治川の氾濫を抑えることはできませんでした。





豊臣秀吉（1537–1598）



秀吉が築いた太閤堤
伏見城の防衛と巨椋池の干拓を目的として、秀吉は太閤堤・堀兼堤・上堤の3堤を築きました。現在では、その多くが住宅地となっています。

明治時代

近代土木技術を駆使し、明治以降の治水事業の基礎を築く。

明治時代になると、淀川では近代的治水事業が実施されました。政府は外国人技師を招き、1874年（明治7）からオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらの指導のもと、主に低水路を安定させて航路を確保する淀川修築工事が行われました。





ヨハネス・デ・レーケ Johannes D Rijke（1842–1913）



デ・レーケが製作した水勢計画図
（明治20年4月作成）
宇治川（現在第一橋梁の北側）の改修計画が描かれています。

デ・レーケ改修後の御茶屋

淀川の主な洪水（明治以降）

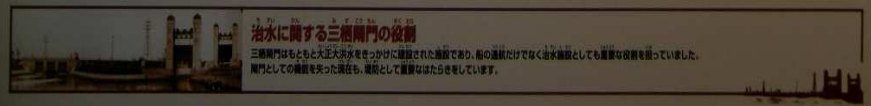
1885年（明治18）	7月、台風豪雨による淀川大洪水（「明治大洪水」といわれ、淀川改良工事を行うきっかけとなった） 淀川左岸の枚方三矢堤、伊加賀堤のほか222箇所が決壊
1896年（明治29）	9月、台風豪雨による淀川大洪水 鳥羽、納所などで堤防が決壊し、淀川右岸地区一帯が氾濫
1917年（大正6）	10月、台風豪雨による淀川大洪水（「大正大洪水」といわれ、淀川改修増補工事を行うきっかけとなった） 淀川右岸の大塚堤が200mにわたって決壊
1953年（昭和28）	9月、台風豪雨による過去最大の淀川大洪水（宇治川では過去最高の流量1,780㎥/秒を記録） 宇治川左岸の向島堤が決壊
1959年（昭和34）	8月に台風7号、9月に台風15号（伊勢湾台風）が襲来 木津川上流で大被害（淀川本川の被害は少なく、木津川上流地域での被害が非常に大きかった）
1965年（昭和40）	9月、台風豪雨による大洪水 天ヶ瀬ダムが竣工した直後であり、初の洪水調節によって淀川下流への影響を軽減した

淀川の氾濫実績



伏見付近における主な河川改修工事（明治中期以降）

1896年（明治29） 〜 1910年（明治43）	淀川改良工事 ●宇治川と桂川の合流地点を納所から八幡まで移す。 ●宇治川と巨椋池を分離して巨椋池を締め切る。
1918年（大正7） 〜 1933年（昭和8）	淀川改修増補工事 ●三川合流地点に木津川・宇治川の背割堤を造り、桂川右岸の引堤などを行う。 ●観月橋から三栖に至る右岸堤を造り、伏見港を堤内に引き入れる。 ●三栖に閘門と洗堰を建設する。 ●巨椋川を開削する。
1939年（昭和14） 〜 1954年（昭和29）	淀川修補工事 ●向島左岸堤を計画堤防高まで嵩上する。 ●京阪電車鉄橋〜御幸橋までの両岸の築堤を行う。
1954年（昭和29） 〜	淀川改修工事 ●観月橋より上流の改修を行う。 ●天ヶ瀬ダムの建設に着手する。

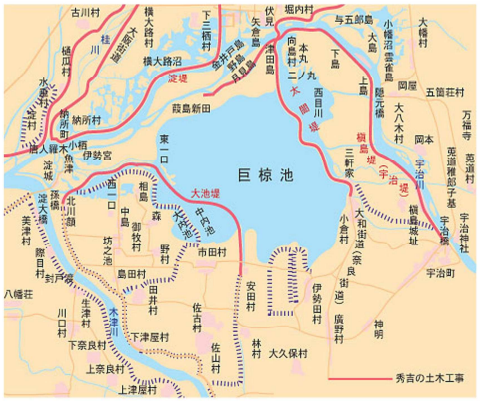


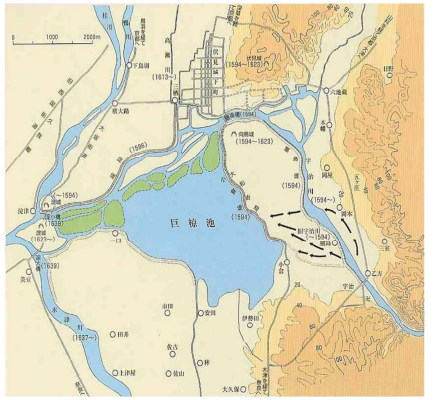
治水に関する三栖閘門の役割

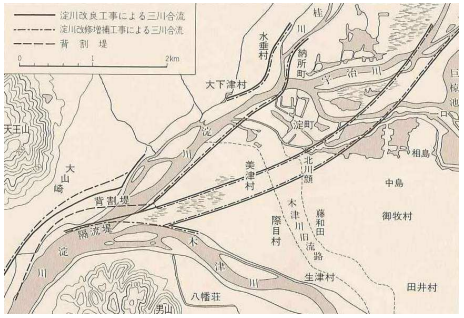
三栖閘門はもともと大正大洪水をきっかけに建設された施設であり、船の通航だけでなく治水施設としても重要な役割を担っていました。
閘門としての機能を失った現在も、堤防として重要なはたらきをしています。

豊臣秀吉による巨椋池周辺の大改修と伏見港の建設

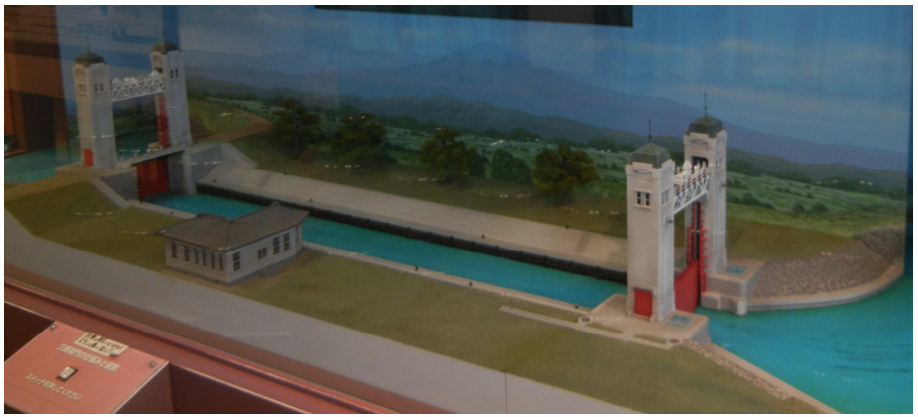
秀吉の時代の巨椋池沿岸図
当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。









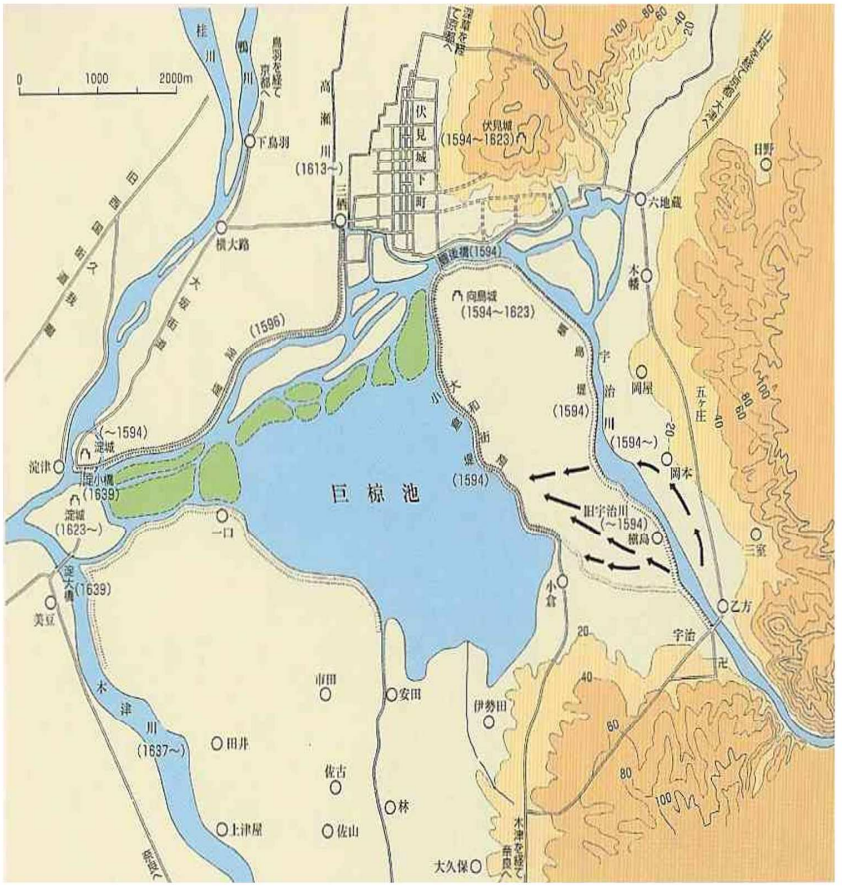


豊臣秀吉による巨椋池周辺の大改修と伏見港の建設

秀吉の時代の巨椋池沿岸図

当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。





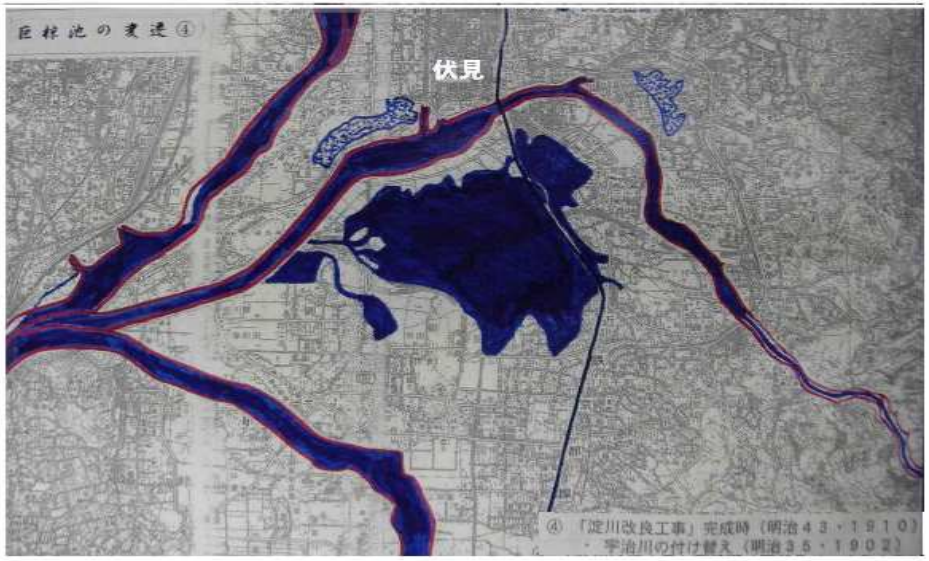
淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤（太閤堤）着手前　文禄以前（1590）



秀吉による河川工事後　文禄5年（1596）
・文禄堤の築造、左岸連続堤の概成　・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後　明治18（1885）木津川の付け替え
明治35（1902）宇治川の付け替え



昭和の改修・巨椋池干拓後（現在）
巨椋池干拓　大正7年（1918）～昭和16年（1941）
三川合流点の道流堤、引堤等　昭和8年（1933）
今の堤が完成　昭和43年（1968）


東高瀬川
南尼崎町
琵琶湖疏水
丹波橋
東堺町
御香宮
竹田街道
大手筋
角倉了以の碑
濠川
寺田屋
京橋
大倉酒造
月桂冠
北浜
宇治川派流
南浜
新高瀬川
西浜
長建寺
京阪
中書島
伏見港公園
伏見港
三栖閘門
三栖洗堰
宇治川
濠川を行く蒸気船
伏見船場
伏見港　京橋
歴史の詰まった酒蔵の街
伏見を歩く
2012.5.15.











京阪の鉄橋をくぐって　濠川沿いを北へ

2012.5.15.


「薩摩島津伏見屋敷跡」石碑
伏見中学校
交番
呉竹文化センター
丹波橋
京阪本線
近鉄丹波橋
近鉄京都線
JR奈良線
N
薬局
下板橋
下板橋通
松林院
大黒寺
金札宮
聚楽橋
土橋
伏見区総合庁舎
竹田街道
三菱東京UFJ銀行
毛利橋
毛利橋通
御香宮神社
24
月桂冠昭和蔵
京都中央信用金庫
京都銀行
みずほ銀行
伏見銀座跡石碑
桃山御陵前
御香宮神社
JR桃山
大手橋
伏見大手筋商店街
伏見桃山
「坂本龍馬、避難の材木小屋跡」石碑
京都大橋総合病院
「会津藩駐屯地跡（伏見御堂）」石碑
旅籠・寺田屋と旧跡地
阿波橋
寺田屋
龍馬商店街通
伏見奉行所跡
「伏見土佐藩邸跡」石碑
會了以石碑
であい橋
京橋
濠川
公衆トイレ
伏見夢百衆
「伏見口の戦い激戦地」石碑
月桂冠本社
松林院
至宇治
伏見公園
長建寺
伏見南浜小学校
濠川（宇治川流派）
弁天橋
観月橋
新観月橋
「伏見長州屋敷跡」石碑
中書島
竹田街道
外環状線
月桂冠大倉記念館
府立総合体育館
伏見港公園
宇治川
酒蔵風景・月桂冠内蔵酒造場
宇治川公園
至奈良











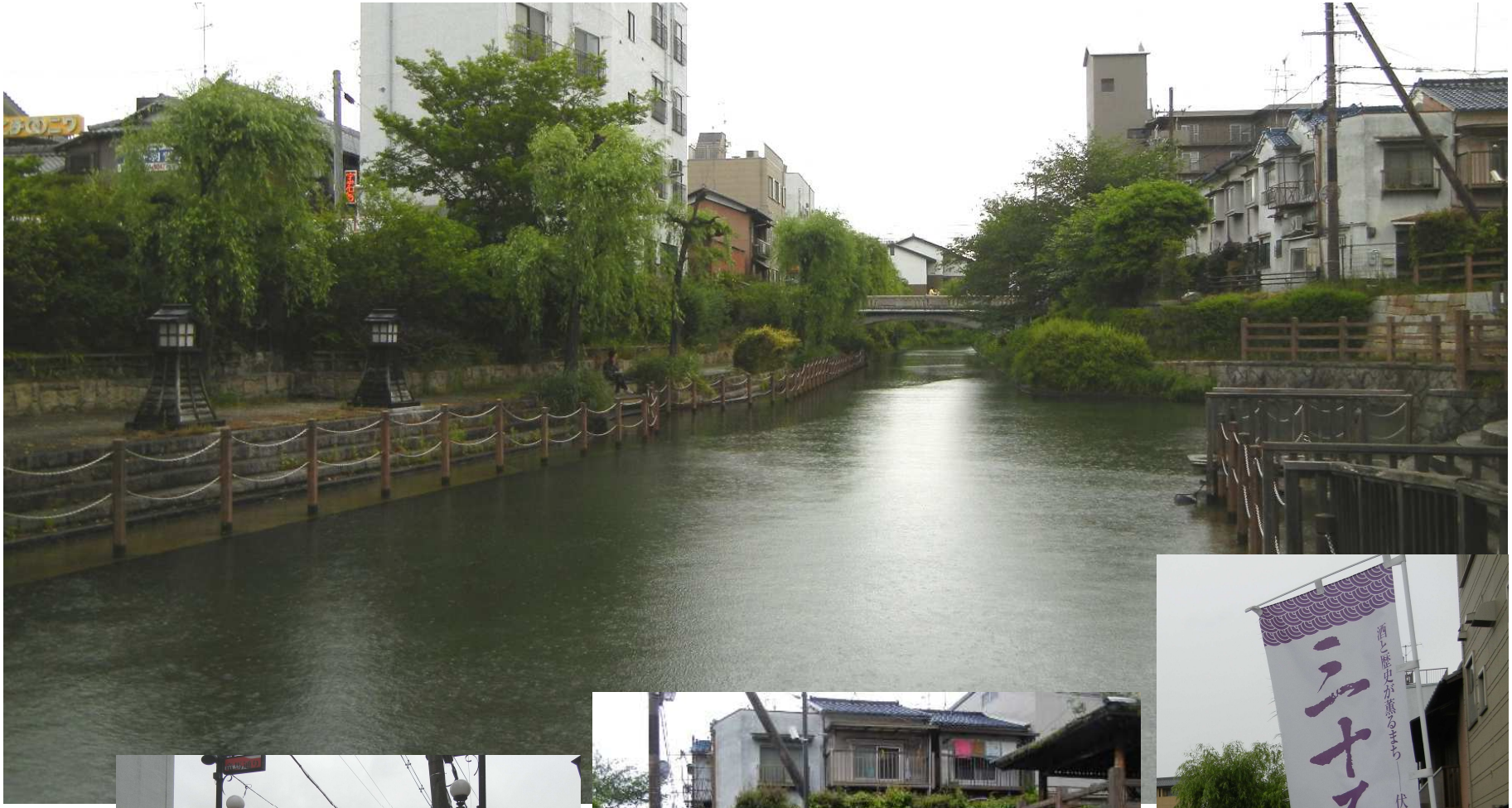
宇治川派流との分岐点　角倉了以の碑があるであい橋　2012.5.15.
















酒と歴史が薫るまち——伏見
二十石船



宇治川派流　京橋と蓬莱橋の間の寺田屋浜に「竜馬お龍」の碑　　2012. 5. 15.



伏見の商店街　竜馬通りにかかる　蓬莱橋　　2012. 5. 15.

水路沿いの道をあがり、伏見の街をすぐ横の寺田屋へ



坂本竜馬が襲撃された寺田屋　　2012.5.15.



坂本竜馬が襲撃された寺田屋　　2012.5.15.


竜馬通り
御菓子 辻政
竜馬通り
たなか

伏見の酒蔵の界隈　2012. 5. 15.





伏見の街中　酒蔵の界隈　2012. 5. 15.


伏見銘酒
清酒




月桂冠
大倉記念館
Gekkeikan Sake Okura Museum





月桂冠　大倉記念館　正面　2012.5.15.









月桂冠　大倉記念館　2012.5.15.



大倉記念館の裏　弁天浜にある　十石舟乗り場　　2012.5.15.






奉納
弁財天












黄桜


黄桜









丹波橋近く　下板橋通りを東から西へ疎水を渡ると酒造工場の前に
薩摩島津藩伏屋敷跡　寺田屋から脱出した坂本竜馬が逃げ込んだところ









伏見の濠川北部・疎水の町並みの中に　秀吉の時代　商人町として栄えた「尼崎」「堺」の名を見つける

秀吉伏見築城の折り、堺や尼崎の職人たちが伏見城下に移され、
彼らの住む町が、今も尼崎町堺町の地名が伏見に残っている。



堺とともに尼崎は中世の末から豊臣時代にかけて、港町・寺内町として栄えた日本有数の自治都市だった

瀬戸内海を通して西国から都へ輸送されるさまざまな物資が往来し、なかでも京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として、大物や尼崎の港は大いに栄えるとともに、大覚寺や本興寺を中心にそれぞれ寺内（境内）や門前に町屋を展開し、独立した町と寺社門前の集合体として堺とともに　中世日本有数の自治都市となった。

この頃の尼崎は港町として、船頭・水主や、陸上の物資を運ぶ馬借などがいただろう。また、米、塩、油、材木などが海上ルートから入ってきたと考えられ、これらを保管する土倉（倉庫業者しばしば高利貸業も）その他の商人や手工業者　そして僧侶や武士も居住し、また漁民や農民も少なくなかったと推定される。 こうした都市住民が結集して、都市共同体を形成していたと考えられている。

〈〈 秀吉の味噌すり　尼崎 寺町の廣徳寺にある石碑 〉〉

明智光秀を追討する秀吉は、尼崎で軍勢から離れ一人になってしまう。
明智勢から身を隠すため駆け込んだのが当時大物にあった廣徳寺。
髪の毛を剃り落とし僧に化け、台所で味噌をするという迫真の演技で
敵をやりすごしたという。
『絵本太閤記』に記された逸話だが、史実として明らかではない。

絵本太功記・十段目尼崎の段は脚色があると思っていましたが、
この話は小さい時から史実と思っていました。

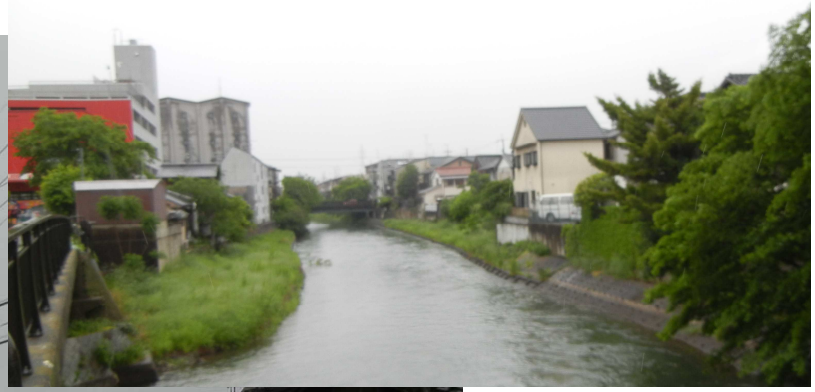
どうも　そうでないらしい。

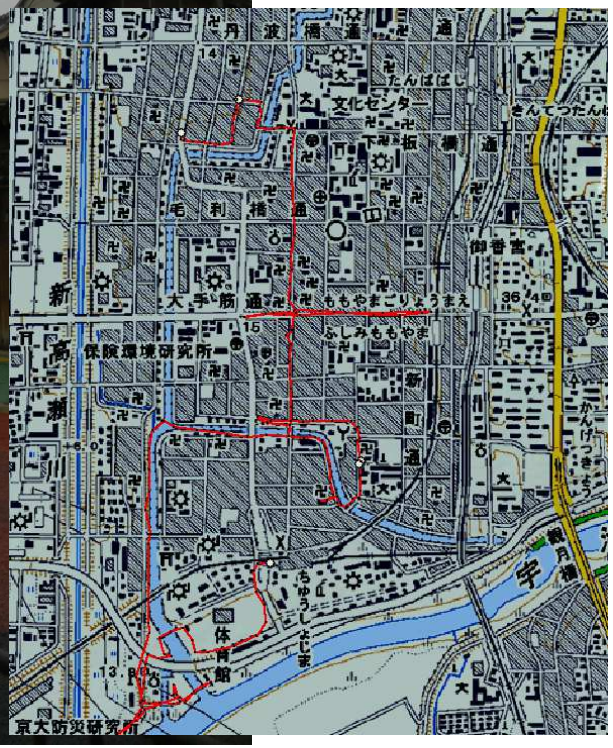


寺町の廣徳寺にある石碑

濠川が直角に東へ曲がり、疎水（東高瀬川）となる角にある**竹田街道**　聚楽橋の北岸へ出ると街歩きもおわり







聚楽橋を渡ったところ　まっすぐ北へ竹田街道が続く　2012.5.15.


木津川
淀川
旧巨椋池
伏見港
宇治川
中書島
濠川
桂川
御香宮
伏見
東高瀬川
丹波橋
琵琶湖疏水
おわり　2012.5.15.
by Mutsu Nakanishi
Image © 2012 Digital Earth Technology
Image © 2012 DigitalGlobe
Image © 2012 GeoEye
Google earth